

綴葉

てい
よう

'25 11

No. 442

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

綿矢りさ著『激しく煌めく短い命』

有馬恵子著『京都出町のエスノグラフィ ミセノマの商世界』

バザールワールド

特集／村田沙耶香を7冊読む

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

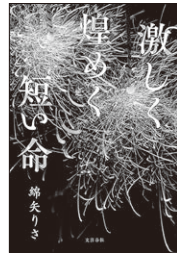


univ. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

綿矢りさの四年間の集大成——女性同士の恋と愛の物語

激しく煌めく短い命

綿矢りさ著
文藝春秋



「^{ゆづり}綿の唇が私の指に触れるまえ、同極同士の磁石が向き合うように、小さな磁場の狂いが起きて反発しあった。でも目に見えない圧のかたまりを超えて触れ合ったら、身体が溶けそうになった。……こんな気持ちはおかしいと分かってても、もっともっと近づきたい。触れ合いたい、綿を一人占めしたい。」

京都出身の芥川賞受賞作家・綿矢りさが連載に四年を費やした最新作は、二人の女性の恋と人生をめぐる美しい長編小説だ。

■彼女たちの愛と距離、足元の痛みと

第一部「二三歳、出会い」で描かれるのは、内気な主人公・久乃と澁刺な中華料理屋の娘・綿が京都で過ごした中学時代。正反對の二人の少女の視線は、無邪気かつ残酷な序列に支配される教室では交わらないはずだった。しかし、二人の心音は徐々に重なり合う。愛（というにはまだ柔らかくすぎるそれ）が熱を帯びていく日々がまるまるとした京都の言葉で綴られ、綿矢りさの魅力が堪能できる。

だが、その甘い時間はクラスからの違和と好奇の目に晒され、きちなくなっていく。その関係にピリオドを打った「生まれの悪い子やから」という言葉。残ったのは親族から目をそばめられる出自

の久乃の痛みか、あるいは日本語が苦手な親を持つ綿の痛みか。そして第二部「三十二歳、再会」では、東京を舞台にした二人の姿が描かれる。一六年の月日は彼女たちの人生の分岐を確定するには短いにしても、その残酷さを読者に伝えるには十分な長さだ。その距離を飛び越えて、彼女たちは再び手を繋ぐことはできるのか。結末への言及は控えるが、六四〇頁の長さを読者に微塵も感じさせない綿矢りさの技量にただ脱帽するばかりだったと述べておく。

■仮に連帯が私たちの手にあったとして

この物語をシスターフッド的な分析をもって読むことは可能だ。本作では京都に根深く残る差別意識、平成の女性の性的消費のあり方など、綿矢りさ自身の生きた時代が批判的に描出されている。そこから浮かび上がる外国人やレズビアンへの差別と排除、異性愛主義から弾かれた境遇の異なる女性たちの連帯可能性——なんて、そんなふうに（実際そうした意図を感じる記述は多い）。

ただ、この物語にそうした「感動」を読み取る時、読者はまるで自らの理解の枠に久乃と綿の人生を押し込むようなものもある。タイトルが仄めかすように、この作品の根底にあるのは「足元で、死がこんなにも叫んでいる」こと、^{「これだけ長生きしても、人生は短い」}こと、「永遠に生きられたら時代を待てばいいけど、私たちはそうじゃない。今ある時代しか生きられない」こと。傷と痛みの雨の下で生きざる久乃と綿の背中に、私たちはどんな言葉とともに手を伸ばすことができるのだろうか。

（浅煎り）

（六四〇頁 税込二五八五円 8月刊）

京都出町に響き合う声——「小さな店」の魅力に迫る

京都出町の

エスノグラフィ

ハザールワールド

ミセノマの商世界

有馬恵子著

青土社



「京都出町のエスノグラフィ」——タイトルを見ただけで、もう読まずにはいられない。エスノグラフィの手法を用いて、京都出町とくに出町枳形商店街のポリフォニーを描き出すこと、本書の目的はそこにある。対象となる店は「徒歩で行き来することのできる半径二キロメートル以内の狭い範囲内」。グローバル資本主義の拡大とともにスーパーやショッピングモールが乱立するなかで、「小さな店」は一般に「滅びゆくもの」とされてきた。しかし現在、若者を中心に人びとはむしろそうした「小さな店」に惹きつけられている。それはなぜか。そこにはいかなる魅力があるのか。本書を通じて私たちは、それら「小さな店」の魅力を知ることになる。

本書の面白さは、その要約を示すだけで伝わらると思う。本書ではまず、出町がいかにして誕生し、いかにして存続の危機を乗り越えてきたのかが語られる。枳形商店街のアーケードが完成したのは半世紀ほど前の一九七七年。当時は危機の時代であり、大型スーパーこそ大規模小売店舗法を通じて出店を制限されていたものの、ミニスーパーやコンビニの台頭は出町にも影響を及ぼしていた。スーパー反対闘争は過激さを増し、出町の店主たちはスーパーの本社前での座り込み抗議、また国会への乗り込みをするほどだったという。

しかしその後、店主たちは方針を転換し、外部の敵を排除するのではなく、祭りを通じて人びとが触れ合えるコミュニティを作ることが目指されるようになる。その過程で鴨川デルタが整備されるなどして、現在の私たちが目にする枳形商店街が形成されるのである。

次に語られるのは、出町の個々の店の活動である。枳形商店街に店を構える老舗の呉服店と乾物屋は、古くからの伝統を受け継ぎつつ、いかにしてその仕事を現代に適合させているのか。商店街に新たに開業したKYOTO GRAPIEのカフェギャラリーと出町座は、商店街にどのような変化をもたらしたのか。出町柳駅前のシェアサイクル店「エムジカ」と高野の「喫茶you&me」は、いかにしてその「穴場」とも言うべき場所を見つけ出し、地域との関係を築いてきたのか。スーパーの倉庫で間借り営業をする「あくびコーヒ」や出町柳駅前を中心に移動販売をする「やまいも屋」といった「スキマ」で店を営む者たちは、なぜその形態で営業するに至ったのか。商店街の路上で週に数回店を営む八百屋とテキ屋はいかなる共生関係のもとにあり、またそこにはいかなる礼儀が存在するのか――。

次の指摘は興味深い。「『都市のスポンジ化』による空き家の増大は、『やっかいな』防げべきもの』であるのと同時に、店を営もうとする者にとって、『幸運にも』潜り込むことのできる『側面をもたらす』。都市の危機は逆説的に『穴場』や『スキマ』を生み出すことで都市を開いてゆくのであり、その間隙を鋭く見つけた者たちが、現在、出町で魅力的な活動を行なっているのである。

出町の魅力、恐るべし。本書の読後、散策すべし。

(はや)

(四五四頁 税込四六二〇円 7月刊)

コンビニ人間

村田沙耶香著
文春文庫

主人公はコンビニでアルバイトをしている。接客、陳列、掃除。普通の店員に見える。しかしこの主人公、何かおかしい。「コンビニの店員」に適合しすぎている。適すするというか、コンビニの一部になっているというか、一体化しているというか……



幼少期、自分が変わり者であると自覚した主人公は、自我をなるべく出さずに生活していた。アルバイトで初めて接客をしたとき、「世界の正常な部品としての私」が誕生した。いつしか主人公の判断は全てコンビニを基準にしてなされるようになっていた。そんな中、一人の男がバイトに入ってくる。店長や同僚のことを底辺だの負け組だの言うような非常に不快な人物だ。ある時主人公はこの男とファミレスで話をするのだが、そこで彼の心の内が吐露されることになる。

二人とも私とは違いすぎて深い共感はないものの（気味悪さすら感じた）、二人が心の内に抱えているものは大なり小なり皆も持っているように感じた。すなわち、この世の中で生きるためには「普通の人間」のマニュアルに従いそれを演じ続けなければならない。そんな社会からの要請に従順になれるかで居心地が変わってくる。主人公の場合はコンビニの店員としてそれに順応しているが、男はそんな世界に迎合することを拒み、苦しみながら「普通」から逃げている。

コンビニという題材こそ身近なものの、テーマは想像以上にセンシティブである。読んだ後にはコンビニが、全ての人が、そして自分の事すら全く違って見えるだろう。我々もこの世界から排除されないために、「普通」に生きている。

（竹輪）

（176頁 税込693円）

特集

村田沙耶香を 7冊読む

「奇想天外」な世界観を作り上げ、その世界を描くことで性の「普通」「常識」「規範」を問い続けてきた村田沙耶香——。たしかにどの作品にもこの村田沙耶香像は見られるが、そこには微妙なグラデーションがある。本特集では、7冊の村田沙耶香本を並べることで、村田沙耶香がその都度の作品で、いかに違う角度から、現在の世界の価値観に挑戦しているかを描き出したい。村田ワールドへ、ようこそ。

（ばや）

しろいの街の、 その骨の体温の

村田沙耶香 朝日文庫

「伊吹は私のおもちゃなんだから。逆らっちゃだめだよ」——小学校四年生の結佳は、同じ習字教室に通う同級生の伊吹にそう囁く。伊吹は体が小さい。だから抵抗できない。「伊吹、舌出して」——そうして二人は正しいキスの仕方わからないままに舌を絡め合う。それは性欲なのか支配欲なのか、それとも恋心なのか。結佳は自分の欲望をどう発露させればいいかわからない。結佳は暴力的な仕方でありそれを発露させることができない。



本作の舞台は開発途上のニュータウン。その清潔な「しろいの街」に、結佳と伊吹は住んでいる。冷たくて無機質なこの「骨」のような街が、結佳は嫌いだ。しかし結佳はどこにも逃げ出せず、この街で中学生となった。中学校ではスクールカーストが絶対の掟。伊吹が一番上のグループ、結佳は下から二番目のグループ。その差は埋めがたい。伊吹は体も大きくなり、身長はいつの間にか結佳を追い越した。だから昔のように「おもちゃ」にはなってくれない。強引にキスをしようとしても「こういうのは、ちゃんと付き合ってるんだと思う」と言われ、強い力でとめられる。しかし結佳の欲望は収まらず、ある日伊吹の家に押しかけ、伊吹の性器を口に含み、射精させてしまう。「私はこの冷えた街の、唯一の体温である伊吹を掴む」。自分の欲望と歪んだかたちでしか向き合えない結佳。しかしかあるとき、転機は訪れる。結佳は骨の街の体温にたどり着く。それはいかにしてか——。

本作の世界観はほかの作品ほど奇想天外なものではない。しかしだからこそ、村田沙耶香の生の素朴な声をそこに聴き取ることができるのではないかと私は思う。

(ばや)

(320頁 税込 770円)

マウス

村田沙耶香 著
講談社文庫

「mouse。ハツカネズミ、小ネズミ…臆病者。内気な女の子」mouse という単語にはそんな意味もあるらしい。人目につかないところをちょろちょろと動き回る姿は、確かに臆病に見える。



小学五年生になったばかりの女の子、田中律は自分が他人からどう思われているか、ということにひどく敏感だ。クラス替えで仲の良い友人と別のクラスになり、新しい友人を作らなければならない。除け者にならないよう、仲良くなれそうな大人しめの女子を探そう。なんとか三人のグループを作ることができた。他方クラスの中で友人を作れず、一人で過ごしていたのが塚本瀬里菜だ。彼女は空気を読めず、泣いてばかりでクラスの皆から嫌われていた。そんな瀬里菜と律が…。

物語の後半では、大学生になった律の視点から物語が語られる。そこで主題になるのも、相手との関わりの中で少しずつ自分自身の在り方を見つめ直す主人公の姿である。律は周りの目を気にしながら、求められる自分を演じる。瀬里菜はそうありたい自分を演じるようになる。

自分とは異なる他者との関わりを通して自分の姿を見ること、そして相手も自分との関わりで段々と変化していくこと。それを実感すること。少しでもいいから、自分の生を肯定すること。ありきたりかもしれないが、今を生きる私たちにとって普遍的で、それでいて重要なテーマだ。奇抜な世界観が描かれていると思われがちな村田沙耶香の作品だが、親しみやすい作品もある。

臆病なネズミは、可愛らしい動物でもある。ほの暖かい読後感のガール・ミーツ・ガール。

(荒砥)

(256頁 税込 704円)

星が吸う水

村田沙耶香著
講談社文庫

「あたしは地球とセックスする。それを梓に見せたい。梓の中にある辞書の、セックスという言葉の意味を、一度だけ、崩壊させた。」——村田沙耶香は、わたしたちの生きるこの場



所が地球であるより先に宇宙だということをよく知っている。重力に息苦しくなったとき、宙を見上げることを教えてくれる。

本書には表題作と「ガマズミ航海」の2篇が収録されている。どちらも主人公は30代に差ししかかった女性。鶴子は「脳の中の性感帯を刺激するためにデートという前戯をする」世間一般の性的嗜好に興味が持てず、性指向は作るものだと言豪語する。一方の結真は、口寂しさに膣で性器をおしゃぶりするのをやめるために、性行為ではない肉体関係を「ガマズミ」と名づけて模索する。SF でもなんでもない、いたって「普通」の世界を舞台に、主人公たちは「30を超えたら……」なんてどこ吹く風で、結婚の一手手前の恋愛や性交を軽やかに解体していく。

「あたしたちは空間なんだ。皮膚に区切られているだけで、小さな暗闇のかげらなのだ。星の光で少し表面が光っているだけで、自分たちは皮膚で区切られた宇宙なのだ。どうして今まで気付かなかったのだろうか」

けれども村田沙耶香は、わたしたちが宇宙の欠片にはなりきれないこともよくわかっている。鶴子の考えは理想論だと一蹴され、結真の試みは失敗に終わる。所詮は重力にさからえない、ただの肉のかたまりだと突きつけられる。それでも、何かが少しずつ変わる。重力があるからこそ、わたしたちから排出される水は地面に染み入り、この星と溶けあうことができるのだから。

(くたくた)
(240頁 税込704円)

丸の内魔法少女ミラクリーナ

村田沙耶香著
角川文庫

小学校3年生のとき、魔法の国から来たポムポムに渡された魔法のコンパクト。これに向かって呪文を唱えて大変身☆魔法少女ミラクリーナは今日も皆の笑顔のためにがんばります！……



という「設定」の36歳OL。やっと通勤というときに今日中の仕事を振られても、ミラクリーナに変身したら、世界の平和を守るため、テキパキ仕事を片付けちゃう。ある日かつての相棒マジカルレイミーことレイコが家に駆け込んできた。交際相手の正志はひどいモラハラ野郎だ。絶対に別れるべき！なのに、なぜだか二代目マジカルレイミーに就任した正志と魔法少女活動を始めることになり——。

表題作をはじめ魅力的な短編4作からなる本書だが、全編に通底するのはその意識的な「設定」の存在だろう。登場人物らが物語の設定を「設定」として認識しているのだ。

初恋の相手を1週間だけ監禁する大学生の千佳は、最後の想い出作りに好きな男の子に尽くす、という設定を作り、それを監禁相手と共有する(「秘密の花園」)。高校生のユートが通う学校では「性別」が禁止され、皆「どちらでもない性」という設定を与えられて生活している(「無性教室」)。若者から「怒り」という感情が消えたことに怒っていた40歳の真琴は、「流行の人格」を設定するための集会に居合わせる(「変容」)。

この世のあれこれが単なる設定だとしたら？ 村田沙耶香が問う「普通」の概念を本書では「設定」と言い換えることができるかもしれない。すると「誰に何と言われようと、真実だと胸を張って言える感じ」であるミラクリーナの「設定」に対して、他3作ではその脆さが否応なく浮かび上がる。(ひるね)

(240頁 税込704円)

地球星人

村田沙耶香著
新潮文庫

村田沙耶香が好きな人は
ここで読むのを止めてほし
い。以下にはこの本を読む
べきではない理由が並ぶか
らだ。主観的なものから順
に列挙する。



1) 不快であるから：最

初に断った上で読んでいるのだからネタバレしても構わないと思うので言うが、主人公の奈月は最終的に、自らに性的暴行を働いた大学生の両親を食べる。食人は言うまでもなく不快だ。 2) 陳腐だから：自分が宇宙人であるという空想は言わずもがな、奈月が受ける両親と姉からの虐待、小学生の時に受ける性的暴行とトラウマ、心の拠り所である従兄弟との愛、夫との性交渉なしの結婚生活、母と姉が執拗に夫とのセックスを勧めてくること。これら全てに既視感がある。この小説の前半は端的に言って、紋切り型に満ちている。何かメッセージ性のようなものを受け取りたいのなら、帯だけ読んだらいいのではないか。 3) 完成度が低いから：例えば 1) に挙げたような不快さは、大江健三郎が書くようなリアリティを兼ね備えることがない。なぜなら近年の小説の特徴としてしばしば挙げられるように、この小説には描写が少ない一方で会話が多いからだ。その結果として不快さは真に迫ることがなく、不快さとして効果を上げることができない。この本の下敷きの一つとしておそらく『目むしり仔撃ち』が挙げられるが、そちらを併せて読めば納得してもらえらう。

異論はもちろんあると思う。評者が男性だから、というのもあるだろう。とはいえ、同様の感想を抱く人は少なくないのではないか。他の作品はまた違うのかもしれないが、とりあえず本作については以上だ。 (コーク)

(336 頁 税込 737 円)

消滅世界

村田沙耶香著
河出文庫

“聞いただけで具合が悪くなって……夫婦がセックスするなんて、そんなおぞましいことが……”

村田沙耶香が社会に漂う「普通」を解体するのに長けているとして、本作で描かれるのは、夫婦での性行為が近親相姦となった世界。人工授精が当たり前になり、セックスという蝶番が外れた愛と家族の像は軋み、ぼやけていく。恋と性行為はもはや排泄物かのようなだが、主人公・雨音はそれを手放すことができないまま生きる。この漂白された世界で、自らの本能が「正しい」形をしているかを繰り返しながら、確かめるかのように。

そんな折に飛び込んできたのは、人工授精をコンピューターで統制する実験都市・楽園のニュース。そこにもはや「家族」は存在せず、住民全員が「おかあさん」として「子供ちゃん」を共同で育てる仕組みだ。違う遺伝子から生まれたはずの「子供ちゃん」は同じ表情で微笑み、同じ仕草で涙を流す。恋愛の歪さに耐えかねて楽園へと駆け落ちした雨音であったが、自ら遺伝子を受け継ぐ子供への執着すらも徐々にこの街の正しさに飲み込まれていく。——“命が繋がっている光景という強制的な正しさの前で、私たちは抗うことができずに、その「素晴らしい光景」に感動し、従い続けるのだ”

“世界で一番恐ろしい発狂は、正常だわ”と、雨音は言う。私たちの生きる「正常」な世界は、全ての欲望が叶うユートピアか、それとも人間が消滅したディストピアか。常識が解体される快感と人間のグロテスクさの両方を強烈に浴びせてくる本書の後に残る感覚は、セックスのそれとどこか似ているような気がした。 (浅煎り)

(288 頁 税込 693 円)



新刊コーナー

歴史学は世界を変える ことができるか

松沢裕作著
岩波書店



世界を変える、とは大きく出た。けれどもこの問いを投げかける著者の態度はいたって真摯かつ謙虚である。史料を読み、何ごとかを語る——歴史学にできることは所詮、その程度だ。しかし、そもそもそれはいかなる仕事なのか。その具体的な方法をミクロに分析したのが前著『歴史学はこう考える』だったとすれば、社会における歴史学者の職能をマクロに論じたのが本書である。

著者はたびたび、社会を「液体に満たされた立方体のようなもの」にたとえる。混濁した液体の中で、過去の痕跡を辿り、説明を与えることが歴史家の仕事である。この立方体は閉ざされていて、誰も外に出ることはできない。人びとはその中で抑圧されている。けれどもときに、立方体の外を夢見る者がいる。彼らの夢はついに夢で終わるかもしれないが、彼らもまた立方体の住人である以上、その夢

は社会の内部に痕跡として残されるだろう。歴史学者はこうした痕跡——史料の言葉を読むことで、抑圧を生み出す構造を明らかにし、また一方で、夢見られたものを記録する。それらは直接的には世界を変えないかもしれないが、解放への新たな夢に繋がるだろう。何より、そう信じて史料を読む歴史学者の営為もまた、ひとつの夢なのである。

それは《いかにも甘い夢想》かもしれない。しかし「それでも」と云うことを、著者はやめない。この、それでもなおという抵抗の意志が、本書を貫いている。

(水炊き)
(二五八頁 税込二六四〇円 8月刊)

最後の山

石川直樹著
新潮社



登山の苦しさや仲間たちとの出会いと別れ。著者は二〇一九年のある青年との出会いをきっかけに、標高八〇〇〇メートルを越える十四座の山々に登った。本書は、そこでの記憶を忘れないための記録である。もちろんこうした山々の景色への感動は、

この十四座で撮影された写真集『シシヤパンマ』でその片鱗を感じることができる。しかし、著者が感じた人々との絆や感情は写真には浮かび上がらない。本書は写真家の石川直樹が記す、写真では表せない人々との物語とそれに伴う感情の記録だ。

何よりも、登山方法やそこから見える景色などではなく、人間関係そのものに重きが置かれていくことに価値がある。登山隊を組む時にも、今までの経験から信頼できる友人とザイルパートナーを組む。登山中に諦めるか継続するかという難しい判断の局面でも、ガイドである友人の判断と自分の感情にいかに関わり合いをつけるのか、その苦悩が描かれる。

たとえば失敗の果てに挑んだ二度目のカンチエンジュンガ登頂チャレンジ。もちろん、登山では一グラムでも荷物を軽くすることが鉄則であるが、一緒に登山に臨んだペンバは、最終キャンプでお香を焚いて折っていた。そんなペンバは、登山中に命を落とした。彼の訃報を聞いた時、信仰に疑問を持ち、自身の登山に強く誘わなかったことを悔いる。

そんな人間らしい写真家の、登山を通じた友人たちとの関わり。著者が撮影した写真には写らない、忘れてはならない命と感情の物語である。

(フナチ)
(一二三頁 税込二四二〇円 8月刊)

雨雲の集まるとき

ベッシー・ヘッド著

横山仁美訳

雨雲出版



アパルトヘイト下の南アから、国境を越えてボツワナに逃れてきた青年マカヤ。

乾いた大地を歩きながら、彼はようやく自由を実感する。だが、彼を迎える村もまた、英国の保護領支配からの独立を前に揺れていた。若き白人技師ギルバートが近代的な農業を導入しようとし、首長の保守的な権威と衝突する。土地の知恵を受け継ぐ女性たちは黙々と畑に立ち、村の暮らしを支える。干ばつや社会の変化に適応しながら、人びとは衝突と対話のあいだで、新しい関係を築いていく。

自身も南アからボツワナへと亡命した作家ベッシー・ヘッドは、この作品で何を描こうとしたのか。白人の母と黒人の父のもとに生まれた「カラード」の彼女は、教師やジャーナリストとして働くも、抵抗の最前線には立てず、亡命した。複雑な出自によって社会からこぼれ落ちた彼女が、自身を重ねた主人公マカヤの行き着く先に選んだのが農村だった。国家や民族の闘争から離れ、大地に根ざそう

とする生。厳しい孤立を経験した彼女だからこそ、政治的な同時代の南部アフリカ文学とは一線を画す作品が生まれたのだろう。

この作品は植民地主義、人種差別、ジェンダー、環境といった大きな問題を描きながらも、それに回収されない人間の感情の機微を丁寧に掬い取っている。怖れ、妬み、誇り、赦し——その揺れが、地の文で率直に描かれる。一人ひとりから滲み出た感情は、集まって雨だれとなる。その雨だれは、ひび割れた現代を、それでも他者と生きようとするわれわれに染みこんでくる気がした。(たいやき)

(二八八頁 税込一九七〇円 5月刊)

ハウジング・バイ・ピープル
《居住の自律》を取り戻す

ジョン・F・C・ターナー 著

岡部明子・南川厚輝訳 慶應義塾大学術出版会



一九五〇年代、ペルーの首都リマ。人びとは限られた資金の中なんとか資材をやりくりし、生活の変化に合わせて少しずつ家を建てていく。若き英国人建築家ターナーは、リマに居を構えて人びとの営みを観察し、「住宅とはなにか」という人間の根源的な問

いに向き合った。彼が見出したのは、住宅は完成品ではなく、住まう中で組み替えられる空間ということだ。リマでの経験をもとに、彼が住宅について徹底的に検討した古典が、半世紀を経てついに邦訳された。

ターナーは本書で「住宅は自律的でなければならない」と主張した。住宅の自律とは、居住者が自ら「何を・どこに・どのように」建てるかを決められる自由のことだ。ターナーは住宅の価値を、それが人びとの生活の中で「何を可能にするか」に見出した。豪華な家を与えられたとて、居住者の必要を満たさなければ生活は行き詰まる。だからこそ、自ら環境を変えられる必要があるのだ。

この理念は七〇年代以降、途上国の住宅政策に影響した。土地と最低限のインフラだけを整える「サイト&サービス」は、コスト削減の論理と結びつき、国家の責任を後退させた。訳者・岡部はこれを「誤読」と批判し、本書を読み返す意義を強調する。ターナーは資材管理などへ自立を支える公助への必要性を説いたが、政策は〈自助〉を推進したのだ。住宅建設が専門化され住まうことが消費になってしまった現代。ターナーの問いは、いまの住まいと社会とは別様の未来を描く想像力を与えてくれる。(たいやき)

(二五六頁 税込四四〇〇円 8月刊)

英米文学アラカルト

お気に召すまま

岡本正明著

英宝社

メニュー表を開く。

気分や好みにすべてを委ね、思いのままに注文する。頭から

読み通す必要はない。気になった箇所から気の向くままに。なんといいたって、本書はフルコースではなく「アラカルト」。



英米文学の論考・エッセイ集である本書には二つの特徴がある。一つ、品揃えの多様さ。

ヘンリー・ジェイムズの作品、「意識の流れ」に関するウィリアム・ジェイムズや西田らのテキスト、オルダス・ハクスリーにおける歴史の観念、レイチェル・カーソンの海洋文学……さらには三島、川端、村上春樹と和洋折衷、その品数なんと三十皿以上。二つ、「文学」の話題に留まらない拡がり（特に第三部「思想のフロンティア」）。文学テキストを経由しつつも、認識論、観念史、複雑系、生態系、カーニヴァルなどなど、諸概念を縦横無尽に駆け回る。耳慣れない概念も噛み砕いて説明されるので置いていかれる心配はなく、

章によっては文献紹介があるのも嬉しい。ま

た入門書としての側面もあり、第四部ではホーソン『緋文字』を始めとした様々なアメリカ文学作品を解説・紹介する。単なる概説というよりも、分析の視点や鍵となる概念を例示し、アメリカ文学というテキストを読むの前で読み解いてみせる。

論考あり、紹介・解説あり、短いエッセイあり、そして対象も視点も種々様々——これが花序のように寄り集まって、英米文学の世界を多角的に浮かび上がらせる。入門者から上級者まで、誰が読んでも新たな発見がありそうな射程の広さもまた魅力だ。（猫足）

（五一四頁 税込二七五〇円 6月刊）

ジェイムズ

バーシヴァル・エヴェレット著

木原善彦訳

河出書房新社

話題騒然、重版出

来！ の本書は、ご

存知の通り、『ハッ

ク・フィン』を、黒

人奴隷ジムの視点から書き直したものだ。

従来『ハック・フィン』の魅力とされてき

た語られたような文体のなかでは、白人のハ

ックと黒人のジムの間で英語の「壊れ方」に



優劣がつけられていた。革命的な文体と人種の偏見は表裏一体だったのだ。一方で、本作においてジェイムズ（ジム）の一人称視点は、理知的な書き言葉の文体で進んでゆく。しかし、白人の前で口を開くときはこう、「わたしは一つしかしゃべり方を知らねえだよ」——それは暴虐な支配者たる白人、「自分の好きな嘘は信じる」けれど「都合の悪い真実は無視する」人々に、自らの蒙昧を信じ込ませておく、生きる知恵なのだ。この「劇的アイロニー」（と、ジェイムズは言う）のもと書き直される物語の痛快さに私たちは快哉を叫ぶ。

しかし、この作品を（現代が要請して止まない）倫理的に正の物語として読み、それで満足してしまうなら、その時あなたは「自分の好きな嘘は信じる」人々と何も変わらないことになってしまう。ジェイムズが言う「劇的アイロニー」は、作者エヴェレットとあなたの関係として複製されてしまう。作品構造が示唆するこの罠を一度疑ってしまったならあなたはなんとも居心地の悪い分岐点に立つことになるだろう。

皆が認める正しい物語を疑うなら、倫理は自分で見出すしかない。しかしそれは、ハックが「よろしい、僕は地獄へ行く」と叫んだのとまさに同じ地点でもある。（コーク）

（四一六頁 税込二七五〇円 6月刊）

恋愛詩集

カトウツルス／タイプツルス著

岩崎務訳

京都大学学術出版会

時代や地域が変わ

れば、人の価値観は

大きく変わる。そん

な中、何千キロ、何

千年と離れていても不変のものもある。例え

ばそう、恋愛とか。

「生きよう、ぼくのレスビア、そして愛し

あおうよ（……）ぼくにおくれよ、千のキス

を、それから百の」。古代ローマを代表する

詩人、カトウツルスは紀元前一世紀に生き、

そして三十歳ほどで亡くなった。彼の詩作は

ウエルギリウスやオウィディウスといった詩

人にも多大な影響を与えている。

彼は個人的な恋愛、主にレスビア（これは

偽名だと考えられる）という女性との恋模様

を歌った。例えば恋人の不実を歌ったこんな

叙情詩がある。「ぼくの女が言うには、ぼく

以上に結婚したい相手はほかに／いないのだ

と、たとえユピテル様ご自身に望まれよう

とも。／そう言うのだ。だが、女が自分に夢

中の恋人に言うことは、／風と引っこらって

いく水の流れに書かれるべきだ」。



愛憎入り混じる、という感情は古代ローマ人も抱いていたらしい。「嫌いながら愛している。どうしてそうするのか、たぶん君は尋ねるね。／ぼくにはわからない。けれど、そうなるのを感じて、苦しんでいる」。

カトウツルスの作品は恋愛詩のみにとどまらず、誹謗、少年愛、神話、など様々なジャンルにわたる。また本書の後半部分には、同じく紀元前一世紀の詩人であるタイプツルスの作品も納められている。彼らの描く個人的感情は、幾千年を隔てていても、我々とあまり変わらぬように見える。

（三九二頁 税込四二九〇円 8月刊）

（荒砥）

呪文の言語学

ルーマニアの魔女に耳をすませて

角悠介著

作品社

言語研究に際して、

調査対象とする資料

の選択は重要なポイ

ントになる。そのう

えて、言語資料として「呪文」を選択した本

書はまずおもしろい。言語学者である著者は

「あくまでも（……）資料の1つ」として、「魔

女大國」ルーマニアの呪文と向き合う。だが、



呪文は「どうも特別感がある」と言う。

例えば「油がはねた」と今アラカダフラン。「あぶら」の音で始まる両者はその音節量も同じだが、私たちは後者にのみ魔力を感じる。この「普通のことば」と「呪文」を隔てるものは何か。本書では、言語そのものの観察を通して、魔力の発生源、つまりは「ことばが呪文となりうる最低限の要素」に迫る。

呪文を大別すると、〈アラフラーン〉のような理解できない暗号文と理解可能な平文に分けられる。ルーマニアの呪文はその魔術の特性からして暗号文が少なく、本書は主に平文に着目している。手法は一般的な言語学のものだ。言語の形式や機能を記述し分類する。不思議（に思えるよう）な呪文も第一に分析可能なことばであることが分かるだろう。そして、どうやらテキストの特定の構造が魔力を生み出しているらしいことが見えてくる。

前提として「ルーマニアには現代でも魔女がいる」。本書に出てくる魔女は、ファンタジーの魔女でも魔女裁判の魔女でもない。本書は、西欧のイメージに偏りがちな私たちに、東欧の一国、ルーマニアを紹介する一面を持つ。そして現実生活に営む「村のご近所さん」である魔女の呪文を通して、ことばが持つ力を改めて示しているのだ。（ひるね）

（二五六頁 税込二六四〇円 8月刊）

心霊学の理論

ユング・シユティリング著

牧原豊樹訳

幻戯書房

著者（一七四〇—

一八一七）は、ゲー

テと同時代人。貧境

から身をおこし、苦

学の末に大学教授、バーデン大公国宮廷顧問

官まで昇りました。特に自伝小説が有名で、

その第一巻をニーチェはドイツ語散文の至宝

の一つに数えています（同レーベルに邦訳が

あります）。また、プロテスタントの一派で

ある敬虔主義の宗教作家としても知られ、本

書（一八〇八年）もまた深い信仰心に裏づけ

られています。

本書の大きな狙いは、二点です。動物磁

気・磁気催眠の「実験」に基づいて霊の存在

を実証すること、そして沢山の心霊譚を紹介

しそれにコメントを加えることで、霊との

（彼のキリスト教信仰に照らして）正しい付

き合い方を示すことです。

当時、一九世紀初めには、近代的な機械論

的世界観が台頭していただけでなく、ナポレ

オン戦争によって既存の秩序が揺らぐなか、

「視霊者」や「預言者」へのカルト的信仰も



広く物議をかもしっていたようです。その双方
に対し、著者は警鐘を鳴らしています。

今の読者にとって面白いのは、磁気催眠実
験の報告や心霊譚の数々（芥川「妙な話」と
よく似た挿話も！）もそうですが、何といっ
ても「冥界」の位置づけでしょう。また天国
にも地獄にも定められていない魂の住む場所
それは「われわれの物理的・感覚的世界があ
るまさにその同じ場所にある」。著者によれば、
「市民的には立派な一生」以上の価値を知ら
ずに死んだ人たちの霊に囲まれて、私たちは
日々生活しているのです。（投稿・貸出更新）
（四六四頁 税込五二八〇円 5月刊）

催眠術の日本近代

一柳廣孝著
法蔵館文庫

私は胡散臭いもの
が好きだ。胡散臭い
もの、例えば催眠術。
今やイッテQくらゐ

でしか擦られないこの術を、実は明治期には
東京大学の学者たちが真剣な科学として研究
していた、と知ったら驚くことだろう。本書
はタイトル通り、明治～大正の日本で催眠術

がどういった受容をされたのかを丹念に追う。

一口に催眠術と言ってもその周辺には霊術、
魔術、妖術、メスメリズムといった多くの術
がある。それだけではない。それと対象を同
じくする神智学、心理学、物理学、精神医学、
心霊学といった科学もあった。明治という時
代は、こうした術と科学の境界が今ほど明確
化されていない時代でもあり、ゆえに催眠術
は「科学／オカルトの「：」境界線上をスキ
ップ」し、近代日本を暴れに暴れ回った（そ
して、その不幸な帰結としての千里眼事件）。
何より驚くのは、本書に引用される理論書
の多さ。催眠術を研究し、その対処を迫られ
た科学陣営だけでなく、術陣営もまた、当時
の心理学・物理学の知識を（自分なりに）吸
収し、霊術への応用を試みていた。そのほか、
催眠術ブームにおける三面記事の役割、催眠
術に対する法規制などトピックは幅広い。

ともあれ、オカルトの命脈は明治期に急に
途絶えたわけではない。例えば九〇年代以降
日本では術と科学をテーマにしたホラーが急
増し（気になる人は「リング」や「CURE」
を観てみよう）、量子力学で連を引き寄せる本
は今や枚挙にいとまがない。術と科学の境界
を跳梁するオカルトは、その勢いであなたの
元にもやってくるかもしれません……（倉井）

（二七三頁 税込二二〇円 9月刊）

小説家デビュー1年目の教科書

額賀澤著 星海社新書

私事だが先日、公募に出した短篇が受賞し、小説家デビューした。報せを受けたときは喜びに舞い上がったものだけでも、その後じわじわと不安に襲われた。新人賞はゴールなんかではない、スタートなのだ。大御所や売れっ子の群雄割拠する業界に、新人はいきなり放り込まれる。自分は生き残り、書き続けられるだろうか……。本書は、デビュー十周年を迎えた著者が、ぼくのような迷える新人作家にアドバイスを授ける一冊である。

とはいえもちろん、小説家でなくとも楽しめる内容になっている。赤裸々に明かされる出版業界の内幕。小説家と編集者の関係。語られにくいお金の話。以前この欄でも紹介された飯田一史『町の書店はいかに潰れてきたか』と併せて読むと、あなたが手に取る「本」の向こう側でたくさんの人びとが仕事に携わっている、その構造が見えてくるだろう。

著者が強調するのも、そうした人と人との関わりである。コミュニケーションを取ること。人を尊重すること。小説家であらうと、それらは当たり前に大切なのだ。(水炊き)

(二五六頁 税込二二二〇円 9月刊)

なぜ社会は変わるのか はじめての社会運動論

富永京子著 講談社現代新書

変化を遂げてきた日本社会にて、社会は変わらないうと決めつけ、社会を変える人々を軽視する風潮に疑問を突きつける本書。かくいう評者も、日本社会を社会運動の見えにくい社会であると決めつけていた一人である。

一九六〇年代から議論され始めた社会運動論の概要を時系列で俯瞰する本書。前提として著者は社会運動を「私たち一人ひとりが社会を変える活動」であると定義し、気候変動への抗議運動やフェミニズム運動など、我々の記憶にも新しい社会運動や日本での事例を例示しながら理論を説明する。読み終わるころには、駅のバリアフリー設備や各所の外国語表記など、今までは意識していなかった景観のなかにも身近な社会運動が見えてくる。そうすると、もう日本社会は社会運動が見えにくいとは言えなくなるのだ。

フランス、日本、ネパールと世界各地で首相が辞任し、社会の転換期を迎えている現在これまで強く認識されてこなかった主体性を持った「社会を変える」ことに、意識を向ける必要があるのかもしれない。(フランチ)

(二七二頁 税込二一〇〇円 7月刊)

明治維新という物語

政府が創る「国史」と地域の「記憶」

宮間純一著 中公新書

四境の役は一八六六年に幕府と長州藩の間で起きた内戦である。教科書では第二次長州征討などと表記されるが、旧長州藩ではこのように呼び慣わし、王政復古の端緒とされる。右の一例をとっても、所謂ナショナルヒストリーとしての明治維新と、各地域に刻まれた記憶に微妙なずれがあることが窺われる。両者の接近・対抗の様相は本書で分析される五つの地域によっても異なるが、この事例も激動の時代の「勤王／佐幕」の境界が非常に曖昧であることを物語っている。志士として祀られるか、テロリストとして草葉の陰に斃れるか、その差には、後世いかに利用できるかが大きく関わってくる。

ただし、本書の目的は「正しい歴史」を論証し、とすれば「お国自慢」に流れがちな郷土史の誤謬をあげつらうことではない。歴史はいまを生きる人々の必要から生まれる。戦時中の愛国心高揚に、現在の地域活性化——歴史が生まれ、受け継がれ、書き替えられていく営みの背後にある困惑こそ目を向ける必要がある。(くたくた)

(二四四頁 税込一〇三四円 5月刊)

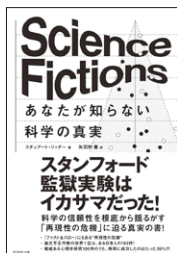
科学の不正

スタンフォード監獄実験をご存じだろうか。役割が人の心理や行動にどう影響を与えるかというのを調べた実験である。被験者は看守役と囚人役に分けられ、刑務所を模して作った施設内で演技させるというものだ。その結果、看守役はより看守っぽく、囚人役はより囚人っぽくなっていく。看守役側は睡眠を妨害したり、素手でトイレ掃除させたりと、非人道的な行動が増えていき、囚人役側には発狂する人が出てきてしまう。二週間の予定だった実験は六日で中止となった。心理学に関する本を読めば必ず出てくるだろう非常に有名な実験である。

しかし最近この実験の杜撰さが明らかにってきた。看守役が行う虐待などは実は事細かに指示されていたという。行動のエスカレートは演出だったのだ。強い権力が与えられると元々の個性と関係なく暴走してしまうことを示したはずの実験だったが、こんなことでは科学としては何の意味もなさない。

ニュースや本で見た数々の研究結果のうち、再現性がなかったり、誇張されたりしたものは想像以上に多いのだと、心理学者のスチュアート・リッチーはいう。彼の著作『Science Fictions あなたが知らない科学の真実』（ダイヤモンド社）は、科学における不正・バイアス・過失・誇張が起こる仕組みを事例と共に解説し、科学界の構造そのものにも問題があることを指摘する。

科学における不正は様々なものがあ



る。冒頭の実験では、虚偽の報告が行われていた。皮膚科医のウィリアムは、黒いマウスから白いマウスへの皮膚移植について、白いマウスに黒いペンを塗って実験成功を主張した（当然すぐバレたのだが）。他にも挙げればキリがない。

なぜそういった不正を行う科学者が出てきてしまうのだろうか。問題の一つに、NULの結果（主張したい結果が得られなかったもの）が軽視されることがある。NULの結果自体は重要なのだが、ポジティブでインパクトのある結果の方が圧倒的に評価される。そういう「良い」論文をたくさん書いて学術誌に載せ続けることが出来なければ、学術機関に採用されなかったり、昇進できなかったりするのだ。量産を優先すると質は下がらざるを得ない。そしてそれは時に研究者を不正に走らせてしまう。

著者はそうした問題を解決するための案をいくつか提唱している。先に挙げた問題でいえば、NULの結果を公表する場を設けるべきだといひ、実際にいくつかの学術誌は再現実験等の出版に対する態度を緩和している。他にも、データ分析を委託することや科学的プロセスに自由にアクセスできることなど様々な制度や仕組みを提案している。ただし、どれもなかなか一筋縄ではいかなそうだが……

解決が必要な問題は根深く、すぐに治るものではない。しかし著者は科学に絶望しているわけではない。本来の科学を取り戻すべく本書は書かれている。科学者は「科学に真実を語らせる責任がある」。修論の進捗に焦る私だが、科学が求める姿勢を決して忘れな（い）をいひに誓う。

（竹輪）

文学の土地 「近代のアテネ」エディンバラ

一九世紀エディンバラ——イングリランドに併合され政治的中心こそロンドンに譲ったものの、独自の文化的土壌を積み上げてきたこの都市は、ニュー・タウン開発等を経て「近代のアテネ」とまで言われるようになる。木村正俊編『文学都市エディンバラ』（あるば書房）も参照しつつ、そんな『文学の土地』エディンバラの一端を眺めたい。



深く、分厚く、密集した高殿の群れ、わがロマンティックな街

スコットランドでもっとも代表的な作家といえば、ウォルター・スコットだろう。歴史小説の確立者として知られ、特に『ウィヴァリー』に始まる小説群は圧倒的な人気を誇った。そのうちの一作『ミッドロージャンの心臓』（一八一八）は、嬰兒殺しの濡れ衣を着せられた妹の恩赦を乞うために徒歩でロンドンに赴き王妃に謁見するジーニ・ディーンズの物語だ。この背景には、実際の歴史的事件であるボーティマス騒動、そして一八世紀のスコットランドとイングリランド間の緊張関係が深く関わっている。ミッドロージャンの心臓とは一八一七年まで存在していたトルブル監獄を指し、物語の全てはこの場所が始まり、この場所を中心に絡み合う。この監獄は、エディンバラだけでなくイングリランドまでも巻き込んで展開する一人の少女の物語の、いわばその心臓部として機能しているのだ。

ブラックウッズ・マガジンの立役者、エトリックの羊飼ひ

一九世紀といえは定期刊行物の時代。当時エディンバラではホイ

ッグ党派の『エディンバラ・レビュー』と、トリー党派の『ブラックウッズ・マガジン』が鏑を削っていた。後者に大きく寄与したのがジェームズ・ホッグである。代表作『義とされた罪人の手記と告白』（一八二四）の舞台となるのは、カウゲイト周辺という当時エディンバラ出版文化の中心であった地域だ。ここには様々な雑誌刊行を計画し挫折してきたホッグ自身の、エディンバラに対するまなざしが垣間見えるだろう。またこの作品はゴシック小説の傑作として名高い。領主の次男として生まれながらも父から打ち棄てられ、母お付きの牧師によって敬虔なカルヴァン教徒として育てられたロバート・ウリンギムが、宗教的使命感から兄ジョージを殺害するに至るまでの経緯が、複雑な構成で綴られている。一筋縄ではいかない語りの視点と、自己の分身とも捉えられる変幻自在のギル・マールティンという悪魔的人物。スコットランドという地理的空間の上に、自我の迷宮という究極のゴシック空間を築いているのだ。

『シキル博士とハイド氏』（一八八六）のスティブンソンもまた、エディンバラの作家である。自我に内包された「内なる他者」という主題はスコットランド・ゴシックのキーワードだ。そもそもこの両作品は共に、トマス・ウィアというエディンバラの伝説的人物から着想を得ている。いわば異母兄弟のような作品なのである。

このほか、ド・クインシーやコナン・ドイルもエディンバラ発の重要な作家である。幽霊小説も多く著したマーガレット・オリファントという作家もまた、スコットランド文学においてきわめて重要な存在だ。オリファントについてはまた別の機会で話そう。（猫足）

編集後記

2025年9月8日——ネパールという小さな国で、たった数時間のうちに、たくさんの若者が命を落とした。腐敗した政府によるSNSの規制を引き金として起きた社会運動は、後に The Gen-Z Andolan と呼ばれる。Z世代（12歳から28歳）と呼ばれる人々を中心に、国会議事堂周辺で平和的に行われていた抗議活動。武装警察が参加者に対して発砲を開始したことにより、事態は一変する。同日、19人もの若者が命を落とし、より大規模な抗議活動が翌9日に行われ、現時点では合計72人の死者が確認されている。

現在ネパールに住んでいる私は、この歴史的転換点に立ち会った。投げられる催涙弾、燃え盛る官僚宿舎や警察署、刑務所から脱走する囚人たち……様々な非日常的な光景を目撃した。なぜ腐敗した政府のために若者たちが犠牲にならなければいけなかったのか。国や社会が変わるためには犠牲が必要なのか。民主主義とは、平和とは何か。考えても仕方がないかもしれない。でも、考えなければならぬ。途上国と呼ばれる国・ネパール。それでも、よほど日本よりも政治や社会の問題に人々は真剣に向き合っていると感じた。京都大学の学生として、日本国民として、考えることを辞めてはいけぬ。

(ブラチ)

当てよう！ 図書カード

「私の本棚」で言及した『ジキルとハイド』。映画『ヴァン・ヘルシング』では、モンスターハンターのヘルシングが退治した相手として登場します。最高すぎますね。さて、ヘルシングといえばドラキュラですが、次のうち吸血鬼物を製作していない監督は誰？

1. ダリオ・アルジェント 2. イーライ・ロス
3. トビー・フーパー 4. ウェス・クレイヴン

(猫足)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは12月15日です。



《7月号の解答》 7月号の問題の正解は、4. の中国語でした。単純に話者が一番多いのは英語なのですが、母語として話す人々の数が多いのは中国語です。図書カードの当選者は、えび天天さん、しまねこさん、天プラそば大盛りさん、いいみょんさん、月見草さんの5名です。当選おめでとうございます。

(ブラチ)

読者がらひゅう

○毎月綴葉の表紙の写真も楽しみにしています！ 季節に合わせてあり、ステキ♡

(附属図書館・いいみょん)

—— 弊誌の表紙は、編集委員のメンバーが過去に撮影した写真です！ モノクロでのわかりやすさや季節、特集に合わせて選んでいるそうです。書評と直接的な関係はないものの、こだわりを持っている事に注目していただき、ありがとうございます。

○特集「語学書」、「外国語独学法」面白く読みました。文型優先型か活用優先型か、把握してから学習を始める。チャンクに注目した前置詞の学習など、習い始めの自分におしえてあげたいし、語学教育をする方々にもこうした知見が共有されると皆が効果的に学習できるだろうなと思いました。

(防災研・月見草)

—— 綴葉編集委員に外国語を習得中のメンバーが多いので実現した企画です。私もその一人ですが、どうしても独学での言語習得には難しさを感じてしまつた中、どのように勉強すればよいか道標があるのは非常にありがたく感じます。

(ブラチ)